

「茅葺」「茅採取」がユネスコ無形文化遺産に登録決定

「茅葺」「茅採取」を含む「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」のユネスコ無形文化遺産への登録が正式に決定されました。

一般社団法人日本茅葺き文化協会 代表理事 安藤邦廣

茅葺き文化を未来に伝える

日本茅葺き文化協会は、「伝統建築工匠の技」のひとつ国選定保存技術「茅採取」の保存団体です。2010年の設立以来、日本の茅葺き文化と技術の継承と振興をはかる活動に取り組んで参りました。本会では、このたびの登録決定を茅葺き文化に関わる多くの人々と喜びを分かち合うとともに、新たな決意を持って取り組む所存です。

茅葺き文化を未来に伝える、すなわち、**茅を刈り、屋根を葺いて、田畑に施し、実りをもたらす、そしてまた茅は生えかわる、この悠久の営みを途絶えることなく推進して参ります。**

茅の循環的利用

茅は、ススキやヨシなど、イネ科の多年草で、茅場は、古来より毎年刈り取り火入れを繰り返すことで、維持され利用されてきました。その用途は、茅葺き屋根の他に、牛馬の飼料や農業資材、生活用具として暮らしを支えてきたのです。これらに使われた茅は、そのすべてが田畑の肥料として再利用され、持続的な農業の基盤でもありました。

茅は、建築資材としてはもっとも弱い材料ですが、それを頻繁に葺き替えることで、むしろ長年生き続ける建築をつくる技は、日本文化の世界に誇るべき特質です。

「茅採取」は、茅の育成、採取、乾燥、保存、選別、そして茅場の維持管理の全てに渡り、農家の生業と暮らしの中で受け継がれてきた知恵と技です。茅場の維持管理も茅採取も地域の共同の営みでもありました。

茅場の多面的機能

茅は、毎年2mあまりに成長し、二酸化炭素を吸収し、火入れで燃やしてもまた生えてカーボンニュートラルです。屋根に葺けば、30年間炭素が固定され、温室効果ガス削減にも大きく寄与します。茅場は水源を涵養し、野草や昆虫、野鳥の宝庫です。今日、農業の近代化や植林によって日本の茅場の多くが失われる中、その多面的機能が再評価され、保全の取組が求められています。

持続可能な社会の象徴として茅葺き文化はよみがえる

茅葺き屋根もまた、その多くが農村風景から姿を消しつつあります。茅を刈る営みも、茅を葺き替える習慣も、その技の継承も危機的な状況です。

今回のユネスコ無形文化遺産登録を契機に、茅葺きのよさを広く伝え、日本の農山村に都市に茅葺きの復活をはかり、茅場も再生する。そして茅の循環的利用を取り戻す。二酸化炭素の削減、生物多様性の維持にも大きく貢献することができます。

これからの持続可能な社会の象徴として茅葺き文化はよみがえります。

茅場と茅葺きのつくる豊かな環境とおだやかな風景の再生を目指して、日本茅葺き文化協会は、世界の多くの仲間と共に、一歩ずつ歩んで参ります。